
金色の螺旋【黒獅の泪】

河合空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金色の螺旋【黒獅の泪】

【Zマーク】

Z6923C

【作者名】

河合空

【あらすじ】

旅の途中に寄った町でシンは『コクシ』という妖怪の言い伝えを耳にする。次の日、宿屋の息子イオの案内で入った森の中でその『コクシ』に遭遇してしまつ。なんとか無事に町へ帰りついたものの、町の人から話を聞くと信じがたい答えが返ってきた。『コクシ』は存在しない、と…

プロローグ（前書き）

拙い文章ですが、最後まで読んでいただけたら幸いです。

プロローグ

夜の帳とぼづが町を覆う

さあ物語の始まりだ

右手には血塗れのナイフ

左手には赤く染まつたお人形

今夜は誰の番？

「こんな満月の夜には“コクシ”が出るんだよ。」

頭上に広がる数多の星々を見上げて少年は教えてくれた。
二時の方角には真ん丸な月が見える。今日は雲一つなく、夜空を眺めるには申し分ない。町を一望することができるのでこの宿の屋根の上は月見には絶好の場所だと言えるだろう。

眼下に広がる町並みはまるで宝石をちりばめたかのように美しく光り輝いていた。

「“コクシ”って？」

旅人は尋ねた。黄金の瞳が優しく少年を見つめる。

「コクシはね、人を食べる妖怪なんだ。3メートルもある黒くて巨大的な身体と金色の目が特徴で、掴まえた人間を頭から食べちゃうんだよ。」

まるで武勇伝を語るかのように少年は話す。

「なんだ。それは怖いね。」

「うん。でもね、ちゃんと弱点だつてあるんだよ。」

「へえ、それはなんだい？」

誇らしげに語る少年に、旅人は首を傾げた。肩口まである旅人の漆黒の髪が揺れる。何故か横髪が不自然に長い。

「それはね、日の光なんだよ。『クシ』は太陽の下では生きていけないんだ。」

「でもそれだと夜はみんな隠れているしかないね。」

旅人がそういうと少年はまるで悪戯っ子のよつた笑みを浮かべて大丈夫だよ、と言った。

そして首から下げている皮の袋を手に取る。

「『』の中に入ってる陽の石は、太陽の光を蓄えておくことができるんだ。だから夜でも大丈夫なんだよ。」

「そりなんだ。じゃあ安心して寝られるね。」

少年は首を大きく縦に振り満面の笑みを作った。

「あ、そろそろ部屋に戻らないと母さんに怒られちゃう。」

少年は急いで立ち上ると梯子に足をかけた。

「夜は危ないからこれ貸してあげるよ。後からちゃんと返してね。」

そういって少年は首から下げていた陽の石を旅人に投げて渡す。

「ありがとう。戻ったらすぐに返すよ……じゃあおやすみなさい。」

「おやすみなさい。」

元気よくそう言つと少年は梯子を伝い、屋根から降りていった。

「コクシ……か。」

旅人は少年から借りた小さな皮の袋を見つめて小さく呟いた。袋から石を取り出せば、強い光が闇に慣れた目を突き刺す。辺りはまるで昼間のように明るくなつた。

闇に溶け込んでいた旅人のコートが光に照らされてその装飾あらわが露になる。

所々に独特な細かい紋様が施されたそれは一見地味ではあるが、その実かなり上質なものである。左手につけられている幾つかの指輪は華奢で優雅でおよそ旅をするものがつけるには似つかわしくない。

「さて……どう動きますか。」

旅人は不敵に笑むと石を袋に戻した。

「シン～！」つちー！」

昨夜と変わらぬ笑顔で少年は旅人を呼ぶ。

「イオ、そんなに急ぐと危ないよ。」

シンと呼ばれた旅人は呆れつつも少年に付き合ひ。もうかれこれ1時間ほど山道を歩き続けていた。

「シンがのんびりしそぎなんだよ。あ、ほら、早く早く……」

それでも急かすイオにシンは僅かに足を早める。険しい道程であつたにも関わらず、シンの呼吸は少しも乱れていない。さらに道は細く険しくなっていく。

事の発端は今朝シンが教会の場所を聞いたことである。

どうせなら、とイオが町案内をかつててくれたのだ。大して長く滞在する予定はなかつたが、それでもイオがしたいと云うので頼むことにした。

子供ならではの視点で町を探索するのは新鮮味があつてなかなか楽しい。それに宿屋の息子だからなのか説明は丁寧でわかりやすかつた。

しかし誰もこんなところにまで案内しろとは言つていない。

「いいだよ。やつを話してた祠。」

イオが案内してくれたのは古めかしい祠。少なくとも作られて三百年は経つているだろう。その周辺には不思議な氣が漂つている。

「へえ、……これはかなり古い呪術だ。ほら、いい。古代語で契約文が綴^{つづ}られてる。」

「何て書いてあるの?」

イオは興味深々に文字を見つめている。

「……我、ルカ・ルサの名に置いて……」「……なんだらう、読めないな。」

その部分は不自然に削られていって文字が判別できなくなっていた。

「『…？』クシじゃないの？」

「どうだらう。…「クシは妖怪なんだらう？だから違うものだと思うんだけど。」

通常、妖怪と呼ばれるものは祠に封じない。祠には崇められるもの、つまり荒神や荒御靈あらみたまを封ずる。妖怪は樹や石、池などの自然の中に封じられるのだ。

一体この祠は何なのか。

読めない部分を飛ばして読み進めていく。

「……をここに封ずる。この地に天の祝福と地の恩恵があらん」と
を。

遺跡などによく見るものとほとんど同じだ。ただ一つ奇妙なのは祠と呪の時代が一致しないこと。この形式の呪はおよそ五百年前に使われなくなっている。

「……イオはいつこの祠を見つけたの?」

「えつと……三ヶ月くらい前かな。クートと狩りにきたときに偶然見つけたんだ。」

クートとはイオが飼つて いる犬の名前だ。身体が大きくて力が強く、一般的に狩猟犬と呼ばれる種類である。

「…………。」

暫く無言で思考を巡らせる。偶然で片付けてしまったにはあまりに一致しきっていた。

シンはそつと祠に触れる。

その瞬間バチッという派手な音がしてシンの手が弾かれた。

「！？シン！大丈夫？」

先ほどまで祠に夢中だったイオが驚いてシンの手に目を向ける。そこは血で真っ赤に染まっていた。

「……大丈夫、心配しないで。」

シンは汚れるから、と無事な左手でイオを遠ざけた。血が滴り落ちて地面に幾つもの赤い斑点を作る。

予想以上に強い術にシンは眉を潜める。刻まれた契約文が欠けてもなお効力を失うことなく在り続ける。

（……いや、これは二重呪にじゅうじゅだ。）

僅かだが違う呪の波動を感じられた。これだけ巧妙に編まれた二重呪は初めて見る。

しかし、こんな誰でも近寄れる祠に何故こんなにも強力な呪が施されているのか。

突然隣りにいるイオがシンのコートの袖をぐつと掴んだ。

「イオ……？」

イオは背後の鬱蒼^{ひつそつ}と草木が生い茂る森の奥の何かを凝視していた。身体は震え、その顔には恐怖と驚愕^{きようがく}の色が映っている。身体を入れ替え、イオを庇うようにその何かと対峙する。

そこについたのは一つの金の瞳だつた。

人の目にしては些^{こすか}か位置が高過ぎる。地表からおよそ3メートルの高さにそれは浮かんでいた。よくよく目を凝らせばそこに人影のようなものが見えたが、光の届かない森の中ではその正体をはつきりと識別することはできない。

3メートルもある黒くて巨大な身体と金色の瞳 …

不意に昨晚のイオの言葉が甦る。

(…「いつが“コクシ”……か。）

対峙してみれば、人々が畏れるのも頷けた。今まで気付かなかつたことが不思議なくらいの威圧感を感じる。

コクシの殺氣がピリピリと肌を刺す。

(見逃して……くれるような雰囲^きじゃないかな。)

小さく呪を唱えながら左手の人差し指と中指を袈裟^{けさ}がけに振り下ろす。そこから鎌イタチが発生し、「コクシに襲いかかる。

風の刃がコクシの身体に届く直前、金属がぶつかるような甲高い音がしてシンの放った鎌イタチは跡形もなく消されてしまった。

「なつ……。」

コクシは体制を立て直す間を『くえず、先ほどシンが作り出した鎌イタチと似たものを放つ。

「つ……シホルディア！――！」

シンは左手をかざし呪を叫んだ。その瞬間透明な盾が出現し一人を包み込む。

コクシの放った鎌イタチはその盾に当たって砕け散った。先ほどまで刃を作っていた風は四方八方に吹荒び、シンの長く黒いコートを大きくはためかせる。

(まずい……。)

砂埃が舞い、コクシの姿が隠れて行く。

砂が入らないように目を細め、全神経を前方にいるコクシに集中させる。冷たい汗が背中を伝つた。果たしてイオを庇いながらどれだけ戦えるのか。

僅かな時間すらも永遠に感じられた。

やがて砂埃がおさまり、視界が開けてきた。
前方には鬱蒼^{うつそう}と生い茂る樹々どこまでも続く闇。

「…消えた……？」

じりと探してものの黄金の皿を見つけることはできなかつた。

「本当に…本当にコクシを見たんだよ。」

興奮してこみイオに彼女は大きな溜め息をついた。彼女曰く、これで4度田らしい。

はいはい、と適当な相槌をうち再びシーツをたたみはじめた。長い黒髪を後ろで一つにまとめて仕事をこなす様は彼女を本来の年齢よりも若干上に見せた。

女手一つで子を育て、小さいながらも宿を切り盛りしてきたのだ。今まで気苦労も絶えなかつたのだらつ。

「嘘じやないんだってば…シンだってコクシ見たでしょ？」

「えっ、あ、うん。」

突然の振りに少々まじつきながらも肯定の言葉を返した。その返答にほら見ろと言わんばかりにイオが母親に捲し立てる。つい先ほど得体のしれない怪物にあつたばかりだというのにこの勢いには驚かされる。子供ゆえの無邪氣さなのだろうか。伝説上の生き物に会えたという体験がそれに襲われたという恐ろしい事実より勝つてているようだ。

「イオ……今までにもコクシに会つたことはあるの？」

「うん。さつきみたいに怖くなかったんだけどね。」

「…………そのときのこと詳しく教えてくれる？」

「うん、いいよ…」

母親に相手にされなかつたのが気に食わなかつたのか、シンの頼みをイオは二つ返事で引き受けた。

「最初はね、あの祠を初めて見つけたときだつたんだ。」

場所をシンの部屋に移動するとイオはそう言って話を切り出した。小高い丘の上に建てられたこの宿の部屋の窓からは町の奥にある山が見える。その山の名はオウガ山。先ほどシン達がコクシに遭遇した山だ。

「クートを追いかけて山の奥に進んで行つたらあの祠を見つけて……なんでこんなところにあるんだううつて思つて祠に触つたんだ。そしたら急にキーンつて音が聞こえて周りの時間が止まつたみたいに静かになつたの。そして後ろを向いたら……。」「コクシがいたんだね。」

イオは「クン」と頷いた。

「でもさつときみたいに怖くなかったんだ。話しかけてくれたし……色んなこと教えてくたし。あ、もしかしたら約束守らなかつたこと怒つてるのも……。」

「約束？」

「うん、満月の日だけなら遊びに来ていいつて……何でなのかはわかんないけど。」

シンは考えこむように黙りこんだ。

話を聞く限りあの祠の封印を解いたのはイオで間違いはないのだが

う。しかし、この程度で解ける封印など施す意味はない。いつたいあの祠には何が奉られていたのか。

黄金の瞳に黒い巨大な身体。

オウガ山と「クシ。

巧妙に編まれた「重呪。

そして満月の日の約束。

「……「クシには何を教えてもらつたの？」

「えつと、海の向こうの国の話とか魔法の話とか謡伽の話とか……。

「……そつか。話してくれてありがとう。」

イオが部屋から出た後、シンはじっと窓の外を眺めていた。

紅茶の香りが辺りを包む。ともに出された焼きたてのクッキーはチョコチップとアーモンドの2種類。口に放り込めばほどよい甘さとサクサクとした食感が楽しめる。

「コクシはもういないんですよ。」

紅茶を一口すすった後イルナはゆっくりと話した。

本来ならばこの時間は仕事に追われているはずだが、時期が時期なのでそんなに忙しくないのだという。今日の客はシンを含めて2人。もう少しすれば西にあるキータニアのカーニバルに訪れる人で満室になるらしい。

「それははどうこいつですか？」

イルナはにっこりと微笑んで手短に話してくれた。

「昔、この町はコクシのせいで荒れ果てていました。作物は食い荒らされ、家屋は壊され、人々は殺されて……。そんなとき東方からきた旅人が不思議な術を使いコクシを退治してしまったのです。」

もう一度紅茶を口に含む。その手はあれていて決して綺麗だとは言えなかつた。

「それからはコクシは子供が夜遅くまで出歩かないようにするための怖い話として使われるようになりました。陽の石は道に迷つてしまつたときに私たちがすぐ見つけることができるよう持たせてるんです。『道に迷つたら陽の石を使いなさい。そうすればコクシはよつてこれないから』って……。」

そこまで話し終えると彼女は小さく溜め息をついた。

「それなのにあの子つたらコクシに会つただなんて……。『ごめんなさいね、子供のお遊びに付き合わせてしまって。』

「いえ、……その旅人は何者だったのでしょうか？」

「ああ……、西へ旅立つたといふこと以外は何も……。」

「西ですか。…………わざわざ時間をとつていただきありがとうございました。」

ヒロヒト微笑んで小さく頭を下げた。

シンは宿から出ると真っ直ぐある場所へ向かった。

それは町の西のはずれに建てられている。たいして大きくはないが、それでも威厳だけはしっかりと保たれていた。

古さのあまり多少開閉がスムーズにいかないドアを潜り抜け廊下を進む。再び現れた小さな扉を開くとそこには幾つもの本棚と、それを全て埋め尽くしている大量の本が広がっていた。

「おや、珍しいお客さんだね。よつこや、我が図書館へ。何か調べ物かい？」

カウンターに座っているのは小柄で優しそうなおじいさんだった。茶色の縁のメガネの奥にある蘇芳色の双眸は穏やかに輝いている。既に八十は超えているのだろう。その顔には彼の生きてきた証だといわんばかりに沢山の皺が深く刻まれていた。

「「クシについて調べたいのですが、何か資料はありませんか？」

イオの話によるとこの老人は町一番の長寿であるにもかかわらずここにある本の情報を全部を記憶しているのだといふ。老人はふむ、と呴いてそのしわしわの手であごに生えている白い鬚を撫でた。

「「クシについて書かれている書物はここにはない。といつよつ、この町にはそんなもの存在しないのじや。」

残念なことにな、と付け足して彼はふたたび髪を撫でた。

「じゃが、本はなくても話をしてもやる」とは言わぬ。…わしの話を聞くかね？」

「はい、是非お願ひします。」

軽く頭を下げる老人は小さく笑つた。

「わう農まうなくてもよい。わあ、あちらでお茶でも飲みながらゆつくり話わう。」

通されたのはこの図書館の中庭だつた。小さいながらも手入れのされている庭は落ち着いた気分にさせてくれる。ちょうど庭の中心に椅子とテーブルがあつた。促されるままにそこへ座ると老人はどこからかお茶を取り出して淹れてくれた。

「コクシの話だつたかの。お前さんはコクシについてのくらい知つておるのじや？」

「黄金の瞳と3メートルほどもある黒い身体だといふことと、昔此処を訪れた旅人に退治されてしまふことくらいしか…。」

「うむ、それは全部間違つた情報じやの。」

静かに、だがはつきりと老人は否定した。

「…? どうこいつことですか?」

「コクシの目は金色ではない。もちろん身体も黒くない。そして今でもコクシは存在する。…コクシの本当の正体はただのライオンじや。」

「ライオン…？」しかし、この地域にライオンはいなはずですが。それに僕はイオと共にオウガ山で黒い身体で黄金の目の大きな妖怪に襲われました。…あれがコクシではないのでしょうか？」

その問いにも老人は静かに答えた。

「その昔、ある行商人がライオンを連れてこの町にやつてきたのじゃ。お前さんが言つとおりこの付近にはライオンなぞおらん。じやから町のものは珍しさと怖いもの見たさでその行商人が泊まつていた宿に押しかけた。そのときなんの手違いがあつたのか、そのライオンが脱走してしまつての…。行商人は多くの傭兵と召使に探せたのだが、結局捕まえることはできなんだ。それどころか多くの死者が出てしもうてな。早々にその行商人は引き上げてしまつたのだ。その後、オウガ山に住み着いたライオンは時折人里に下りては人を襲うようになったのじゃ。……黒い身体の金の目を持つ妖怪に襲われたといったな？近くに古い祠があつただろう？」

「はい。…何故それを？」

怪訝そうな顔をして質問するシンを焦らすかのように老人はお茶を啜る。目尻の皺を更に増やして彼は再び口を開いた。

「コクシとは『黒獅』、つまり黒い獅子という意味じや。昔、此処に訪れた旅人は黄金の瞳に全身漆黒の衣をまとつていた。ちょうどお前さんのようにな。」

その部分に思わず両手を握り閉めた。その旅人こそがシンの探している人物に間違いない。ようやく見つけることができた手がかりにはやる気持ちを抑えながら老人の話に耳を傾ける。

「その旅人は殺してしまつたライオンの魂を近くにあつた祠に祀つ

たそうじゃ。そして、不思議な術を使いそのライオンをオウガ山の守り主とした。そして、コクシが現れて不用意に人々を怖れさせないように封印を施したんじゃ。きっとお前さんたちが見たのはその守り主なんじゃろう。」

ホツホツホ、と軽く笑つて老人は湯飲みに入っているお茶を全て飲み干した。

シンは視線を僅かに下げ、考え込むように押し黙つた。今の話が真実だとするなら、あの殺氣はなんだつたのだろうか。それにイオの言っていた満月の夜の約束も不可解なままである。第一、何故イオが祠の封印を解くことができたのか。

「……あの祠の封印を解く鍵はなんなのかご存知ですか？」

「もちろんじゃ。この町のことわざにわからんことはない。祠の鍵は町人じゃ。魔力を持っていないただの人が触れるによつて封印は解かれる。封印から解かれたコクシはひたすら町人を守るためだけに戦う。」

気付けば老人の湯飲みには二杯目のお茶が淹れられていた。

「一つだけアドバイスをしてやろう。もし、次にコクシと対峙したならば心を静めて『』を見つめるがいい。あれは鏡なのじゃ。」

「……？？鏡？」

「そうじゃ。その意味がわかるときはすぐにくる。」

丁寧にお礼を言つて図書館を出たときにはすでに日が暮れ、辺りは薄暗くなっていた。あれから三時間程度館内の本を見せてもらった。中には見たこともないような呪術が記されている書物まであってつい長居してしまったが、この件に必要になるだろう術は覚えた。とりあえず一度宿に戻るべきだろ。祠に行くにしても日が暮れてしまってはただ危険なだけだ。情報はある程度そろった。今為さなければならぬことも定まった。あとはそれを為すだけ。

宿のドアを開けると、奥から慌てた様子でイルナが出てきた。

「イオ！…？……すみません…、あの、イオを見かけませんでしたか？」

「いえ、……どうがなさいたんですか？」

イルナは非常に落ち着きがなく、顔色もあまり良くない。よくよく見れば目が潤んでいる。イオの身に何かあったのだろうか。

「シンさんがここを出られた後すぐにイオも飛び出していつてしまつたのです。…「クシがいる証拠を持つてくるつて言つてました。いつもなら暗くなる前に帰つてくるのに……。私が…、私があの子の話を信じないばかりに…。」

「イルナさん、落ち着いてください。」

イルナは今にも泣き出しそうだ。現在の時刻は七時半。シンが出て行つたあとすぐなら、イオが出て行つて既に四時間近く経つているわけだ。オウガ山に行つたのだとすれば確かに危険な状況に陥っているのかもしれない。

「いいですか、僕が今からイオを捜しにオウガ山に向かいます。イ

ルナさんは町の人たちを集めてイオの捜索に協力してもらつてください。もしかしたら自力で戻つてくるかもしないので、イルナさんは此処で待つていてるよにしてください。」

一通り指示を出し終えた後、シンはオウガ山へと走り出した。

（仮にあの祠ヘイオが向かつたとしても、町人であるイオはコクシに襲われることはないはずだ。他の野生動物に襲われたか何らかの事故で動けなくなっているか…。）

何にしても自力で動くことができない状況にあるのかもしれない。

頭上には幾つかの星が瞬きだした。眼前に見える山はまるでシンを待ち受けているかのようにずつしりと佇んでいる。

その大きな闇に飲み込まれていくかのように漆黒の旅人の姿は見えなくなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6923c/>

金色の螺旋【黒獅の泪】

2010年10月20日16時59分発行